〔類聚名物考飲食二〕きんとん　きんとう

考ふるに、是は江家次第に餛飩、今の世にもこんとんといふ物なるべし、混渾とかけり、鳥の卵の如くにてあれば、日本紀の神代紀の卷の初に、まろがれたる事、鳥の玉子の如しと有によりて、名付しなるべし、きんとんは、その意あきらかならず、今のこんとんは、うきふ餅の如きあんを入たる丸き餅を、味噌汁にて煮たる物也、今京都邊にてきんとんとも、きんとうとも云餅あり、江戸のあん餅の事也、

〔菓子話船橋〕紫きんとん。

是も求肥を切りて、中の種にして、上餡にて餡ころの樣にくるみ、其上へ又上餡を裏漉にして、そぼろにかけるなり、紅餡白餡色々あり、何れも右の通り同じ製し方なり、

〔鹿苑日錄〕慶長八年五月十三、未明に赴尊勝院略中朝之會席略中菓子金飩茶請筍、

〔槐記續編〕享保十六年十一月廿二日、御茶略中御會席略中御菓子大德寺キントン、アタヽメテ、コフタケムキクリ、

〔書言字考節用集六飲食〕算木餅サンギモチ

〔嬉遊笑覽十上飲食〕算木餅、鹽尻に伊勢宇治邊は年禮の客來れば、先折敷にさんぎちやかとて、二寸ばかり割たる木二三枚、ばらにて結びたるを置、田作かうじなどをまじへ、これを年始の饗とし、次に芋がしら三ツ椀に入て寶珠といふ、これをするゑわたし、小紙一帖を以て引出物とす、家の貧富により、紙の大小多少ありといへり、略註　さんぎちやかとは、算木茶果なるべし、伊勢ばかりの風俗にはあらぬにや、花摘集、元祿三年七月十七日、算木餅を文字にかさぬる灯呂哉、東順　是は其角が父の發句なり、灯籠の組子をいふなり、もと茶果も漢土に其製あり、祝允明猥談、江西俗、儉果榼作數格唯中一味、或果或菜可食、餘悉充以彫木、謂之子孫果合、めづらしきやうなれど、今正月の蓬萊などの果子ども、食ふ者なきやうになりしは、算木餅もおなじかるべし、

算木餅